

平成17年度第1回山形県立博物館協議会 記録

平成17年9月1日(木) 午後1時30分～3時35分
於：山形県立博物館 講堂

出席者 委員10名(大場委員欠席)
向出社会教育課長、結城社会教育課長補佐
伊藤館長、高橋副館長、阿部副館長、安部学芸専門員、
神保学芸員、青木学芸員、八鍬研究員

(進行 高橋副館長)

1 開 会

2 あいさつ

(1) 山形県教育委員会教育長(社会教育課長)

施設設備の老朽化、手狭になったこと、展示内容の固定化等の要因から、かつて4万人台の年間入館者数が2万人台へと年々減少。新館建設は県財政の状況が厳しく見通しがたない。当面は現有施設の中でやらざるを得ないことから、常設展示のリニューアルを目指すこととし、博物館活性化検討委員会を設置したところであり11月をメドに成案を得たいと考えている。博物館協議会委員におかれては、様々な課題について忌憚ないご意見とご指導を賜りたい。

(2) 山形県立博物館長

委員の改選にあたり、就任をご快諾いただいたことに感謝申し上げる。

施設設備の老朽化については冷暖房更新(9-11月)に着手できることになった。展示内容の陳腐化により、進展変貌する社会・県民のニーズに十分応えられないことから入館者は最盛期の1/2に落ち込んでいる。

この中であって、①児童生徒から高齢者まで幅広い層に来館してもらえること ② 学校教育との連携 の二点が課題ととらえている。

これらの課題に対し、次のような対策を講じている。

- ① 博物館活性化委員会(外部委員8名)での常設展示の改装案の検討
- ② ホームページの更新等、広報について充実を図りたい。

特別展「戦争と子どもたち」の開展式にも、ぜひ子どもたちに出ていただきたいと考え、山形七小の協力をいただいた(約80名)

入館者数は5月は前年比で激減したが、特別展、カブトムシクラブ等のPRにより持ち直してきている。秋には館長講座等でさらにてこ入れを図りたい。

3 委員紹介(委員自己紹介。事務局側は館長より紹介)

4 山形県立博物館協議会長・副会長の選出

進行より、規則54条委員の互選により正副会長を決めることを説明し、選出方法等について諮る。事務局の案を求められ、館長より、会長に元木委員、副会長に日野委員でどうか、と提案あり、その旨決定。

(以下、会長が会議を進める。)

5 報告

(1) 平成17年度主要事業の進捗状況について (阿部副館長より説明)

【酒井委員】 カブトムシクラブの参加者は男の子が主か

〔答〕 男の子が多いが、女の子もけっこういる。

【安達委員】 午前中、小学校の夏休みの自由研究の展示を見たところ、カブトムシ、クワガタの標本や、缶のプルトップで虫の形にしたりと、虫がブームかと感じた。

【野口一委員】 琵琶沼の活用状況はどうか。

〔答〕 貴重な種、いい環境を持ちながら活用しきれていない。まことに耳が痛い。いい活用方法についてご教示いただければありがたい。植物専門の学芸員が居ないのが弱点である。

【野口一委員】 山辺町の資料館主催で「白鷹山の歴史と文化」をやった際に、参加者の吉田さん(沼の土地提供者)から、再び脚光をあてられないものか、との意見が出された。

〔答〕 大切な自然環境との認識が浸透しないのが現状である。

【野口一委員】 ミュージアムセミナーの会場に琵琶沼を設定してはどうか。

〔答〕 検討してみたい。

【野口比委員】 ボランティアの育成はどんな方法でしているか。

〔答〕 発足は平成8年、現在38名、世代交代もある。昨年度は募集せず、今年度から養成講座を設定し、博物館を知ってもらうこと、ボランティアの役割とは何かを考えること、等について1年間やってもらっている。現員研修としては昨日から秋田県博等に研修派遣している。また15・16年度には接客・接遇マナー研修を実施している。

【六車委員】 この会の事前にと、一昨日館内を見て感じたこと。

- ① 特別展では小学生の団体、家族連れなどがいたが、あまりじっくり見ていないのはなぜか---展示のテーマが誰に向けたものかわからない。時代に生きていた人々の言葉、姿が見えるものがない。
- ② 戦地慰問の絵葉書、ガラスの奥で、文字が小さく一つ一つじっくり見られない。展示方法を工夫すれば子どもにも訴えうるものとなるのに惜しい。沖縄ひめゆりの塔の博物館では、大きな読みやすい字で、戦時下の証言を読むことが出来る。当時子どもたちの体験についての語り、読みやすい文字資料展示などの工夫が必要。

【永瀬委員】 同感である。あの展示には、見る側にある程度の知識が必要で小学生のレベルより高い。先生の指導が必要で、まず先生が来てみないと。子どもたちに、戦争についてのどこを、何を勉強してもらうべきか、をまず学校の側が考える必要がある。フィルム「戦う少国民」はぜひ先生方に見てもらいたい。

〔答〕 当館としても、内容の焦点化、どの目線に置くかなど、来館者を意識しながら展示構成をしていく必要があると痛感している。

【元木会長】 特別展のテーマ設定、展示物自体は面白いものであり、レベルを落とすのではなく、見やすい展示をぜひ心がけてほしい。

6 協議事項

- (1) 山形県立博物館の今後の運営及びあり方について
- (2) 山形県立博物館の活性化について

【元木会長】 (1)(2) 内容が重なると思われるので一括して議論したい。
(阿部副館長より説明)

【元木会長】 山形美術館、天童市美術館、山寺芭蕉記念館など、巡回展を持って来て賑わっている。決して博物館人口が小さくなっているわけではなく、テーマ次第だと思う。必ずしも展示業者が関わったパッケージの企画を持ってくるだけが能ではないと思う。

当館も特別展示のスペース拡大、予算の拡大を伴わないと、リニューアルしても次の年から人が入らなくなる。二つの方向があると思う。

- ① 県民だけでなく、他県の人も呼べるテーマに取り組むか。
- ② 或いは必ずしも入館者数にこだわらず、他館の真似をしないならしないだけのきちんとした路線を打ち出すか。

【野口一委員】 秋田県博と同じような展示、運営は構造上不可能なこと。巡回展を持っては来れない。山形として目指す方向の確立が必要。ハード面だけでなくソフト面でも博物館活動の拠点となるべき。(東北芸工大の東北文化センターがそれ)。県博の現状は学芸員が弱体。それを補うには、(学芸員、研究者の)ネットワークを確立して、それに立脚した収集・展示の方向をめざすことだ。

当館はせつかく山形城内にありながら山形城の歴史が弱い。市内の施設のどこでもきちんと取り上げられていない。これに取り組む必要がある。

当会でも繰り返し様々な課題についての論議がなされながら、課題が積み残しのままであることが不満である。

〔答：館長〕 活性化委での検討を今年度に行って、展示替えについて来年度から年次的に基本・実施設計、工事と具体的な段取りに入るべく取り掛かっている。

【安部委員】 当会での議論が反映されているのか。当協議会と活性化委との関係はどうか。

【安達委員】 我々が県と県民とのパイプ役を期待されているというが、活性化委でも論議するとなると、この委員会とは何なのかとってしまう。

〔答：館長〕 これまでの反省点として、当会での議論の記録を委員に返していなかったことがある。これからはきちんとお返ししたい。
当会のご意見を活性化委においても十分反映するよう当館が主体的に働きかけながら、リニューアルの計画作りに生かして生きたい。

〔答：社会教育課長〕 この前の当会での、会長からの、展示替えについての予算化を図るべき、とのご意見を受けて、今回リニューアルの入り口にたどりついたもので、当会の意見が具体化につながったケースである。当会の役割は、長期的な視点からの論議をしていただくことにもある。活性化委ではリニューアルに絞って、いかに見せていくかの検討の役割。与えられる金額は1.5億円位と少ない中で、当会の意見も十分生かして具体化を図っていききたい。

【安達委員】 当会から活性化委に委員を入れるべきだった。

【元木会長】 当館では管理職がすっかり代わっても学芸員が代わらないから、議論の継承については楽観視している。

【安達委員】 館の体制として、考えが連続していくべき。

【野口一委員】 前回欠席したが、資料が送ってこられなかった。
以前から、学芸員の複数化が緊急課題と強調しているが、実現していない。我々の発言が一過性のものでしかない。この会の意義は何なのか、と思う。この館をどうにかしなければと思うから色々議論しているのだが。

【安達委員】 我々委員については広報マンの役割も担っているのかと考え、人にもここを紹介しているが、まずこの場所がわかりにくく県外客などはとてまたどり着けない。こうしたソフト面の改善も必要である。

【永瀬委員】 学校には設置基準があり、最近では学校評議員による評価も行われるようになった。博物館の評価はどうなっているか。

〔答〕 博物館の外部評価についてはNPOなどで取り組んでいるところがある。個人がWeb pageでバリアフリー調査などを行っているものもある。

当館の自己評価をするにも、「お客さま」の視点に立って、展示の内容、期間、予算、担当者等に関して自己評価していくことが必要と考えている。今回の特別展は予算は300万円にも満たず、担当学芸員は1名、展示の詰めにも時間の制約。未熟であるとの批判は受け止める。

これからの当館の方向は、身の丈にあったものでなければならぬと考える。巡回展の受け入れはセキュリティ、調温調湿の制約上、不可能である。学芸担当職員はほとんど教員、資格云々だけでなく実質的な資質向上を目指していかなければならないところである。

【永瀬委員】 ① 「総合学習からみた博物館」の資料はよくできている。

- ② 夏休みの自由研究の相談。最近は一つの事に興味を持ってこだわりのある児童も出てきている。夏休みだけにとどまらず、一年を通した自由研究を目途として春先から段階的な相談、まとめ、その後の追跡という流れを助長できるような指導が必要だと感じている。
- ③ 総合学習は各教科がクロスオーバーしている。教科の枠が取り払われたところに子どもは興味を持つ。(例：岩石→石油→環境・生活などの関連)

【元木会長】 この会は耳の痛いことをどんどん言うのが役割だろう。反応がすぐ返らないのは問題が大きいからか。「身の丈」といわなければならないのは悲しいことで、委員としては「身の丈」にあわせる必要は無く、バンバン意見を言ってほしい。

【相田委員】 小学校では博物館を利用しているが中学校では利用が少ない。中文連の立場として見ると、大きな課題に長期的に取り組むための拠点が博物館、美術館なのだろう。教員には、中学生にまた博物館に行ってみたいと言わせられる授業を組んでほしいと望むが、博物館で実際に生徒が食いつく展示内容にするのも大切。今ブームのムシなど自然系だけでなく人文的テーマも重視すべき。生活の中での課題解決のヒントを博物館で得られるように。自分たちのまちを調べる見方が育てられるように。中学校では体育面に比して文化面は肩身が狭いが、生徒たちの中に文化を拓げる発想を醸成したい、工夫すれば博物館がその拠点になりうる。

【酒井委員】 博物館界としては耳が痛い話である。活性化委の資料の中で上杉博物館の角屋さんの発言に、入館者数重視のイベント屋となりがち、との懸念が示されているが、イベント屋だけの発想ではどれだけいいものに取り組めるかが問題。致道博物館の「庄内の学問」展にしても、誰に見てもらおうとしての展示かと問われれば、回答は難しい。

地域の博物館には、子どもたちを引き付け、今後の利用者につなげられるよう育てていく役割があり、この地域で存在価値を出せる博物館となることが基本である。本来の意味での社会教育施設の役割が求められているのだと思う。

【野口一委員】 ある大使館員の話では、その土地にいくとまず博物館を覗く、そこにそのまちの顔が見える、という。その顔となるものを作っていくことが肝要。高文連でも生徒たちの目を博物館に向けさせたいと考え、学芸員一日体験に取り組んでいる。博物館の側からも学校との連携を積極的に働きかけていくべきで、人が足りないからと嘆いていないで、人的ネットワークで補っていくことだ。

【六車委員】 ① 展示内容は万遍無いが、山形の特長、印象が残らない。博物館は地域の顔、面白いのはその顔が見えてきたとき。今回は何か心に残るものが無かった。

② 自然と文化が分断されている。教育、研究の場では今や相互乗り

入れが流れ。自然の豊かさ---人間もその一部、人間の文化も自然の影響を受けている、という理解に立つこと。リニューアルは全部新しくすることではなく、一貫したテーマで既存の展示と新しい展示を融合させていくべきである。自然の豊かさ、それを利用し、それと共存していく知識の豊かさ(山形でこそ。他所ではもはや失われている。)---これが山形の特長ではないか。

- ③ 博物館は情報を得られる場でなければならない。致道博物館では民具の収蔵庫を開放しているが、とてもワクワクすることだ。物が多くあることにも圧倒される。こうした開放策をとっている館が多くなっているが、収蔵庫の中はまさに情報が集積されているところだ。
- ④ 映像が少なかった。イメージ映像ではなく、オリジナルな映像資料が必要。例として山形映像アーカイブリサーチセンターの活動や、北村山視聴覚教育センター(30年以上も自作の記録の蓄積と活用)。それらとの連携により幅をひろげることが出来ると思う。

【安部委員】 特別展は18日までなので、児童生徒、教員にはぜひ見学を勧めていただきたい。

【元木会長】 ① 当会での論議がなかなか実現しないが、メンバーの若返り、思い切って芸工大の学生も、と言ったが、今回は委員の若返り、芸工大の人材と、ひとつ実現した。

- ② リニューアルの検討で、「最上川」という一貫したテーマの検討、自然と人文の融合、いい方向だと思う。しかし、展示はすぐ古くなる、10年後にはその次のリニューアルをやらないと学芸部門に刺激が無い。ぜひ念頭に置かれない。

(3) その他 (なし)

7 その他 (なし)

8 閉 会 (15:35)

※ 終了後館内視察、特別展の解説会を行った(参加委員5名。解説青木学芸員)